



営農情報

第61号 平成29年7月10日

「あまおう」7月の管理

南筑後普及指導センター
福岡大城農業協同組合

10a 当たり収量 5t 以上を目指しましょう

この資料は平成29年6月27日現在の登録資料に基づいて作成されています。農薬使用の際にはラベルや袋に記載されている適用作物などの登録内容と有効年月を確認してください。

現在の状況と気象の経過

【生育概況】

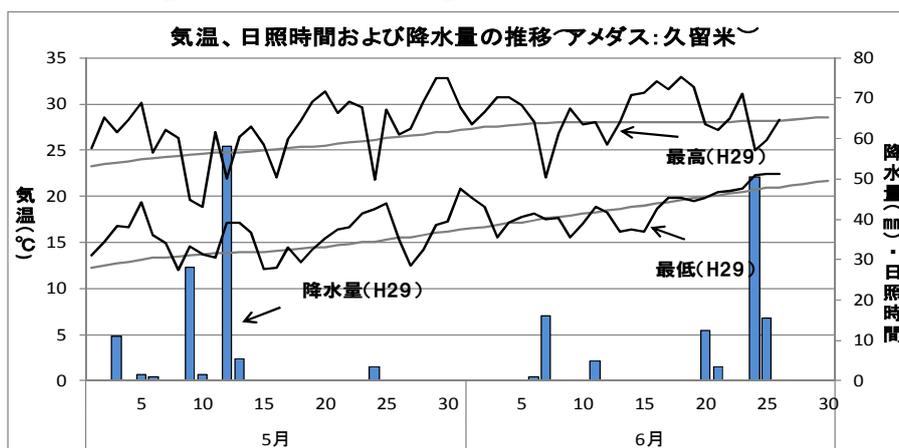
親株から発生したランナーが例年より少ないほ場が見受けられました。その要因として、4月下旬から6月上旬にかけて降水量が平年より少なく、乾燥傾向が続いたことにより、ランナーの発生が抑制されたと考えられます。

梅雨に入り、降雨が続くと窒素流亡による生育停滞が懸念されるため、置き肥を施用する間隔を短くする、適宜液肥を施用するといった対策を行い、健苗育成に心掛けましょう。

【病害虫発生状況】

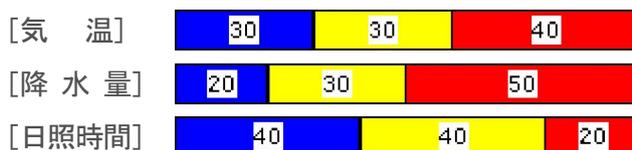
親株期から引き続きハダニ類やアブラムシ類、カキノヒメヨコバイの発生が見られます。

【日照時間と降水量】 (アメダス久留米より)



気象予報と今後の見通し (6月24日から7月23日まで)

気温はほぼ平年並み、降雨量は平年より多く、日照時間は平年並みか少なくなる可能性が高い予報です。(6月22日福岡管区気象台 発表)



凡例:

低い(少ない) 平年並 高い(多い)

【今後の見通し】

[懸案事項]

- ①炭そ病、疫病の発生拡大
- ②軟弱徒長や根傷みの発生
- ③肥料の流亡による窒素不足

[対策]

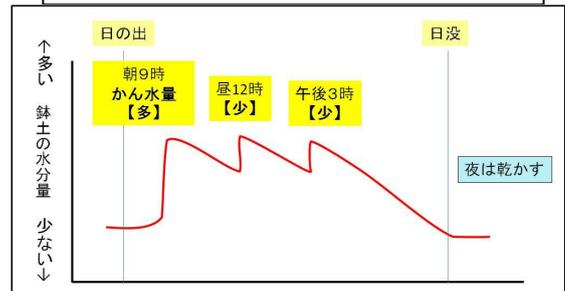
- ①定期的な薬剤散布、発病株とその周辺株のほ場外への持ち出し。
- ②かん水過多にならないように土の乾き具合を観察してかん水を行う。
- ③窒素欠乏を起こさないように適宜追肥を行う。

育苗管理

【かん水】

- 梅雨時期は特に根傷み(湿害)に注意し、培土の乾き具合を観察して時間やかん水量を調節する。
- 少量多回数のかん水を心掛ける(晴天日は一日3～4回程度)。

・かん水パターン事例(晴天日)



【施肥】

- 活着後、置き肥を施用する。置き肥は溶出に時間がかかるため、液肥を1～2回施用する。(例：OK-F-1を1,000～1,500倍)
- 2回目の置き肥以降、最終追肥時期まで液肥の灌注や葉面散布によって窒素を切らさないようにする。特に普通作型は2回目の置き肥から最終追肥時期の期間が長いため、窒素切れを起こしやすいので注意する。
- 降雨によって窒素が培土から溶脱するため、大雨の後は窒素切れに注意する。

【施用例】

6月下旬(置き肥①)
I B化成S 1号で 1～2粒/鉢
↓ 置き肥①施用後：OK-F-1 1,000倍～1,500倍 1～2回
7月中旬(置き肥②)
夜冷・株冷Ⅲ型 I B化成S 1号1粒/鉢 上記以外の作型 I B化成S 1号1～2粒/鉢
置き肥②施用後 ⇒最終追肥時期まで窒素を切らさない

【葉かぎ】

- 葉かぎは、活着後根が十分にまわってから開始する。
- 1回当たりの摘葉数は2枚以内とし、葉数は最初は徒長防止のため2.5～3枚に、それ以降は3～4枚を確保する。(ポット間隔が狭い場合は3枚程度とする。)
- 摘葉作業直後は、「炭そ病」の予防散布を必ず行う(傷口からの感染防止)。

● 最終摘葉時期の目安と葉数

作型	最終摘葉時期と摘葉後の葉数
株冷	入庫10日前に3～3.5枚
夜冷	処理開始直前に3.5枚
普通ポット	8月30日頃に3～3.5枚

【浸水・冠水対策】

梅雨時期は局地的な集中豪雨が発生しやすく、特に満潮と重なると有明海沿岸地帯は、浸水・冠水する恐れがあります。大雨が予想される場合は、事前に育苗床の排水対策(溝の設置や排水ポンプの準備など)をしておきましょう。

病虫害防除

- 農薬の使用回数は、親株から切り離してからカウントが始まる。
- ローテーション防除表を参照して、予防散布を心掛ける。
- 薬剤散布は早朝散布を基本とする(日中の高温時は薬害発生のリスクが高まる)。

【 疫病 】

- 梅雨時期、8～9月の高温多雨期に発生が多い。
- 7～8月に薬剤を予防散布する。



疫病

【 ハダニ類 】

- 葉かぎ後に、薬液が葉裏に十分付着するように散布を行う。

※本田でチリカブリダニ・ミヤコカブリダニを使用予定の場合は、
天敵に影響の長い農薬の使用を避ける。



ナミハダニ

【 カキノヒメヨコバイ 】

- 上位1～2枚目の展開葉を加害し、葉脈間の退緑斑や葉の湾曲を起こす。
- 発生を確認したら薬剤による防除を行う。



カキノヒメヨコバイ

【 コガネムシ類幼虫 】

- 発生が予想される場合は、ダイアジノンS Lゾル 500倍のポットかん注を行っておく。

＜コガネムシ類幼虫に適用される農薬＞

薬剤名	希釈倍率	使用方法	使用時期	本剤の使用回数
ダイアジノンS Lゾル	500倍	育苗ポットかん注	ポット育苗時	1回

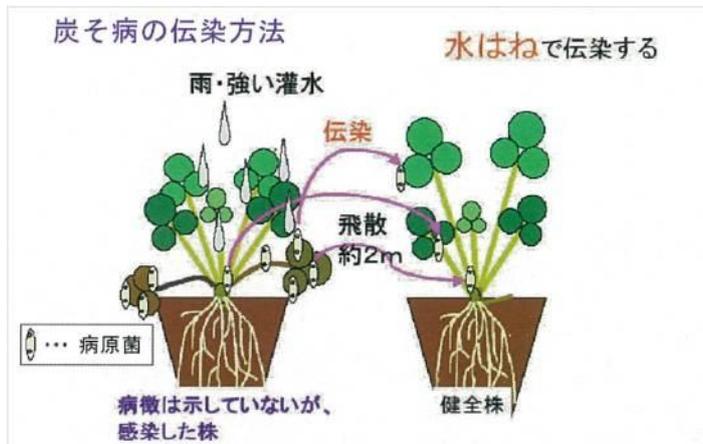
本田準備

ハウス土壌は、雨に十分あてるとともに有機物を十分施用し、8月中旬には定植床の準備が終わるように、計画的な作業を心がけてください。

作業	目的
● 有機物の施用 麦わら：6月まで 完熟堆肥：8月（床作り前）まで	：前年度の栽培により消耗した土壌有機物の補給 ・これから有機物を投入する場合は、完熟堆肥などの十分に腐熟の進んだ有機物を施用する。（施用量の目安 麦わら：30a分の麦わら/10a、完熟堆肥：2t/10a）
● 雨にあてる （6月～7月上旬）	：土壌中の未熟有機物の分解と不要な養分や病害虫の排出 ・土壌中の微生物が、大量の雨水で活性化する。
● 土壌消毒 （7月中旬～8月上旬）	：土壌病害虫(ネグサレセンチュウ、萎黄病)の予防と雑草防除 ・ガス消毒、太陽熱消毒のいずれかを実施する。 （土壌病害虫の実害が発生している場合は、ガス消毒を行う） ・ガス消毒は、クロルピクリン錠剤・クロピクフロー等がある。 ・ガス消毒は事故がないよう、使用量・使用時期・使用方法に注意する。

特集 「炭そ病に注意！」

梅雨入り後、雨が続くと、炭そ病の感染、拡大が懸念されます。炭そ病は病原菌が雨やかん水で発病株から周辺株に飛散し感染します。下記対策に加え、炭そ病感染株の早期発見（頻繁に見回りすること）、早期排除（怪しい株は排除または別管理すること）に努めてください。



炭そ病の雨媒伝染（模式図）

< 発生しやすい環境条件 >

高温期の降雨で発生しやすい（主要発生時期は7月～8月）。発病適温は25℃～30℃で、28℃以上で萎れや枯死が激化します。発病には湿度が重要で、過湿状態では20℃でも萎れ・枯死が発生します。

< 防除対策 >

- 炭そ病の疑いのある株や生育異常株は周辺も含めてすぐはずす！（重要）
- 極端な肥培管理は発病しやすくなるので、施肥、かん水はこまめに！
特に、肥料の効かせすぎに注意！
- 葉かぎやまとまった降雨の後には必ず防除！
薬剤は予防剤が中心のため、連続した降雨が予想される場合は事前に散布してください。
- 多湿条件は、絶対避ける！ほ場内の排水など再確認。
- 雨除け育苗は、風通しを良くし、絶対に蒸し込み状態にしない。

「炭そ病」はこまめに観察・大胆に除去・予防散布で！！

< 薬剤防除における注意点 >

発病後に治療できる薬剤はなく、感染を防ぐためには予防散布の徹底が重要です。炭そ病防除は初期防除が重要。特に採苗期、梅雨期、高温期には重点的に防除しましょう。同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行ってください。また、薬剤の使用に当たっては、登録内容を確認し、使用基準を遵守しましょう。

農薬の安全使用と飛散防止対策を徹底しましょう！